



コーヴェリ包囲突破戦

伊藤裕之助

1944年3月、チェルカッスイ戦以後、敗走を続けるドイツ軍の各部隊はワルシャワ南東約250kmのコーヴェリ地区で再編成を行なうため同地へ集結しつつあった。しかしこの時、コーヴェリは急速に敵の包囲下に陥る。再編のための移動は味方部隊救出の

ための攻撃前進に変更され、SS第5機甲師団を始めとする各部隊は、連隊ごと戦場へ投入された。「コーヴェリへ!!」。圧倒的に優勢なロシア軍を突破し、包囲環を噛み破れ。泥の海に響き渡る海賊達の雄叫び（ヴィーキング・ラフ）。

＋熾烈さを増すロシア南部戦区

『フランツ大佐の馬も撃たれた。凍った斜面で最後の砲と車輛も行きづまる。そこへ対戦車砲弾を撃ち込まれ、馬はちりちりになった。

フランツは砲兵の馬を見つけ、鞍に飛び乗ると斜面をかけ登った。ぎょっとする。T-34が15輛あまりやってくるではないか。赤十字旗を掲げた馬車隊が停止している狭道へ入ってくる。機銃で馬を倒し、車を蹂躪する。履帯は総てをぐしゃぐしゃにした。

「ブタめ、ブタ野郎！」フランツはあえいだ。それが「ヴィーキング（師団）」の重傷者たちだと彼は知っていたのだ。ギレ將軍は彼らを置いていく気にはなれなかったのだ。イッセルシュタイン博士の下で140名が無敵軌

道車に乗せられて出かけ、ほかの重傷者100名、それにB軍団支隊の主包帯所からも30名の傷兵を「ヴィーキング」衛生中隊長トーン博士が馬車に乗せてきたのだ。

フランツ大佐の目の前で彼らの運命は終わったのである。トーン博士が救いえたのは1ダースにも満たなかった。イッセルシュタイン隊もジャンデロフカ西方で戦車につかまり、博士はT-34に殺された』

1944年2月にロシア南部戦区で演じられたチェルカッスイの戦い（コルスン包囲戦）は、上記引用の戦記をみてもその熾烈さがわかり、事実ドイツ軍はここで完全には殲滅こそされなかったが、約1万9千名の人員の損失を受けてほとんどの重火器、車輛を失った状態で3万5千名が友軍戦線へ達した。

そして、その激戦の余韻も冷めやらぬ3月初頭、再び

1944年2月から3月にかけて、東部戦線の南部戦区ではロシア軍による大規模な攻勢が開始された



この南部戦区でロシア軍の攻勢が開始され、カルパチア山脈南東域でフーベ將軍の第1機甲軍が包囲され、ここでもまた第12機甲軍による西方への脱出行の大きなドラマが展開されていくことになる。

大局的に見れば、1944年前半の東部戦線南翼の山はこの2つの包囲脱出戦になる。どの戦史リサーチでもそうだろうが、その何ヵ月かの間のまたその一日一日に演じられた個々の具体的な現場レベルでの、言い換えれば兵士レベルでの戦闘記述（先のチェルカッシー戦の引用もその典型だろう）を認識した上での戦略概観でなければ、戦況を見る目は人間性の欠けたまるで現代のわれわれがただテレビ画面に向かって、手元のスイッチを動かして師団、軍団で勝敗を競うウォーゲームの感覚になってし

まうだろう。

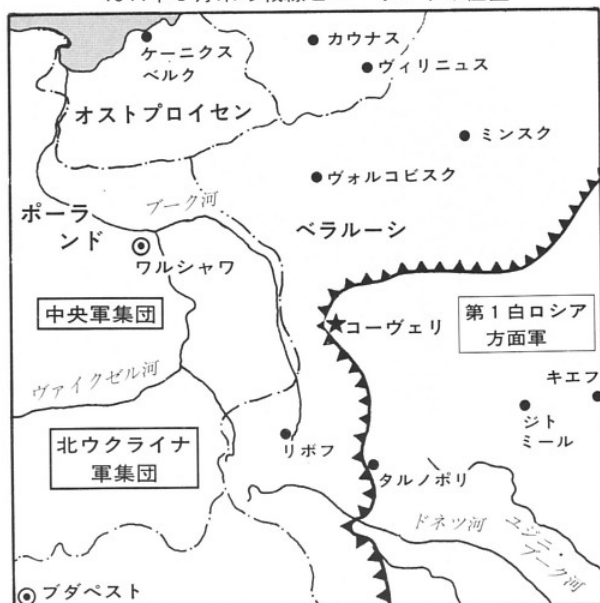
そこでは、地雷を踏んで不具となった兵士、戦車の中で地獄のような炎に焼かれていった戦車兵など、われわれの日常生活の中では考えられないような状況のもとで、命を失っていった一人一人の人間の運命が演じられていたことを忘れては、真の意味で戦闘記録を読んでいく価値はないと筆者は考えている。

その観点からも、大きな戦略的観点からみた戦史書では見過ごされがちな大会戦の中で、その個々の局面で演じられた幾多の戦いを1944年2、3月に絞り込んで詳細に描いていくことは、極めて本質的なことであろう。今回は、ここでは先述のチェルカッシーと第1機甲軍の包囲突破戦の2大会戦の間の局地戦ではあるが、それでも

コーヴェリへ再編のために輸送される第5SS機甲師団“ヴィーキング”のパンター戦車



1944年3月末の戦線とコーヴェリの位置



何千もの兵士達の運命を左右した戦いのひとつ、コーヴェリの戦いとそこで主要な役割の一翼を担ったヴィーキング師団の戦記を中心にその推移を追っていく。

＋コーヴェリへの進撃

コーヴェリは、ポーランドのワルシャワ南東約250km、ルブリンからは東へ約150kmに位置し、2000名以上の負傷者が収容されている野戦病院がいくつかあり、また重要な幹線道路と鉄道路線が通る要衝地であった。戦線で見るとドイツ中央軍集団と南方軍集団（3月30日の名称

変更以降は北ウクライナ軍集団）の境界線やや南、第4機甲軍戦区で正面の第1白ロシア方面軍と対峙していた。

ここはまたプリピャチ沼沢地帯の南端近くに位置し、そこは迅速な機動作戦にはあまり適さない湿地帯の要素が多分にある地形で、パルチザンが跳梁する地帯でもあった。

そして、これらゲリラ相手に町を防衛していた守備隊は、1コ地方守備連隊（現地人構成か？）、SS第17騎兵連隊、SS第17警察連隊、1コ工兵大隊、軽砲6門装備の砲兵大隊、2cm軽対空砲8門装備の対空砲部隊、（比較的年配の）民間人構成で300名からなる鉄道保安部隊2コ、その他小部隊を含めて約4～5000名程度の兵力であったが、今や正面まで迫りくる強大なロシア軍に對峙する格好で、これら守備軍も弱装備のパルチザン相手だけに専念できる状況ではなくなってきていた。

このコーヴェリで、前記チェルカッシーの戦いで装備のほとんどと多くの兵員を失ったヴィーキング機甲師団の再編が予定されており、そこでの収容状況を調べるため師団のO1（特別任務の参謀将校でO1～O3までであった）がそこにまず派遣され、宿舎と整備施設等は適当との判断を下し、師団の2コ機甲擲弾兵連隊、“ゲルマニア”と“ヴェストラント”がまずここへ送られることになった。

1944年3月15日、師団長のギレ將軍は、司令部のあるルブリンからワルシャワの輸送司令官へ必要な列車編成を要請し、両連隊はこれでコーヴェリへの輸送の途へついていた。

しかし、ギレ將軍が彼のO1と共にシュトルヒ機で同



◀コーヴェリ正面に向かう第5SS戦車連隊のパンターA型

▶コーヴェリへの輸送のため鉄道駅に集結した第5SS戦車連隊のパンター戦車部隊

反撃に向かうパン
ター戦車と敵に備
える擲弾兵の重機
関銃チーム



地へ到着してから3日の間に、この町をとりまく状況は一変した。移送の途中だった2コ連隊がまずロシア軍との戦闘に巻きこまれ、ここへ達することができなくなり、続いてその周囲が敵に囲まれていることが明らかになった。ゲルマニアとヴェストラント連隊は、何とか町まで血路を開こうとしたが、確認されたロシア軍は第76、143、184、320各狙撃兵4コ師団に及び、連隊の進出は全く不可能となった。

こうした中、コーヴェリを要塞化してその司令官にギレ将軍が任命される旨の命令が発せられ、この周囲を沼沢に囲まれた（これは防備側にはメリットとなる）2～3km四方の町が“コーヴェリ要塞”としてロシア軍の攻

撃に備えることとなった。

ギレは1897年の生まれで当時47歳だったが、先のチェルカッスィ戦では率先して運命のグニロイ・ティキチュ川渡河の指揮を執り、師団の残余を救ってからまだ幾日も日を経っていないうちに、ここコーヴェリで再び包囲された部隊の責任者となったのだった。

包囲網の中における彼の写真の風貌は、まさに歴戦の老将軍のそれで、もともと牧師のような温和な顔は精悍でひきしまっており、右手には彼のトレード・マークともいえる波状の形をした杖を握り部下を激励している。

この東部戦線の緒戦から、その激しい戦いぶりで敵から恐れられたヴィーキング師団はドイツ、ノルウェー、



第5SS機甲師団長の
ヘルベルト・オットー・
ギレSS少将



デンマーク人その他からなる多国籍混合の師団で、このような部隊にとって、ドイツ人以外の兵士に対し何の偏見も持たぬギレはうってつけの指揮官となり、部下からは父のように慕われていた。

戦後も旧戦友達から慕われた彼は、小さな本屋を経営し、そこで“ヴィーキング・ラフ” Wiking・Ruf（ヴィーキングの叫び、声とでも訳すのか、戦友会誌のようなものだろう）という小刷誌を発刊し、やはりエネルギッシュに活動、1966年に没した彼の葬儀には共に戦ったヨーロッ

コーヴェリ正面で攻撃に備える第5SS戦車連隊のパンター戦車



パ中から多数の参列者が出席した。

この小さいながらも適任の指導者を得た要塞には、まず第55戦闘航空団によって敵制空権下、255回の空輸で270tの物資が投下された。

ギレはエネルギッシュに動き、その周辺の陣地、バリエード構築、兵士達への戦車に対する近接戦闘訓練などを施していったが、その救出部隊の派遣は主要路線が絶えざるパルチザン攻撃や航空機の低空攻撃にさらされ思うようにはかどらなかった。それでも3月21日には前進発進地に第131歩兵師団の先遣部隊が到着、さらにゲルマニア連隊の第3大隊（機甲化）、第190突撃砲旅団などが攻撃準備を整え、同25日、ヴェストラント連隊、SS第5対空砲大隊などを含めた救出部隊がコーヴェリ方向へ東へと進撃を始めたのだった。

各部隊はスターリエコザリイ、ヴィドゥティ、ミラノウィツェなどを制圧しながらコーヴェリを目指したが、この中でもチエルカッシーを経由して町へ向かって真西に走る路線に沿って、SS第5戦車連隊の有名なカール・ニコルン・レック中尉の第8中隊のパンター16輦が第434連隊（第131歩兵師団）から抽出した30名から成る擲弾兵を跨乗させて最先鋒として道を切り開き、3月29日14:30には、次の無線を発した。“中隊はチエルカッシーの西600mの丘の上に達し、敵陣地を突破。激しい降雪。



攻撃を続行中”

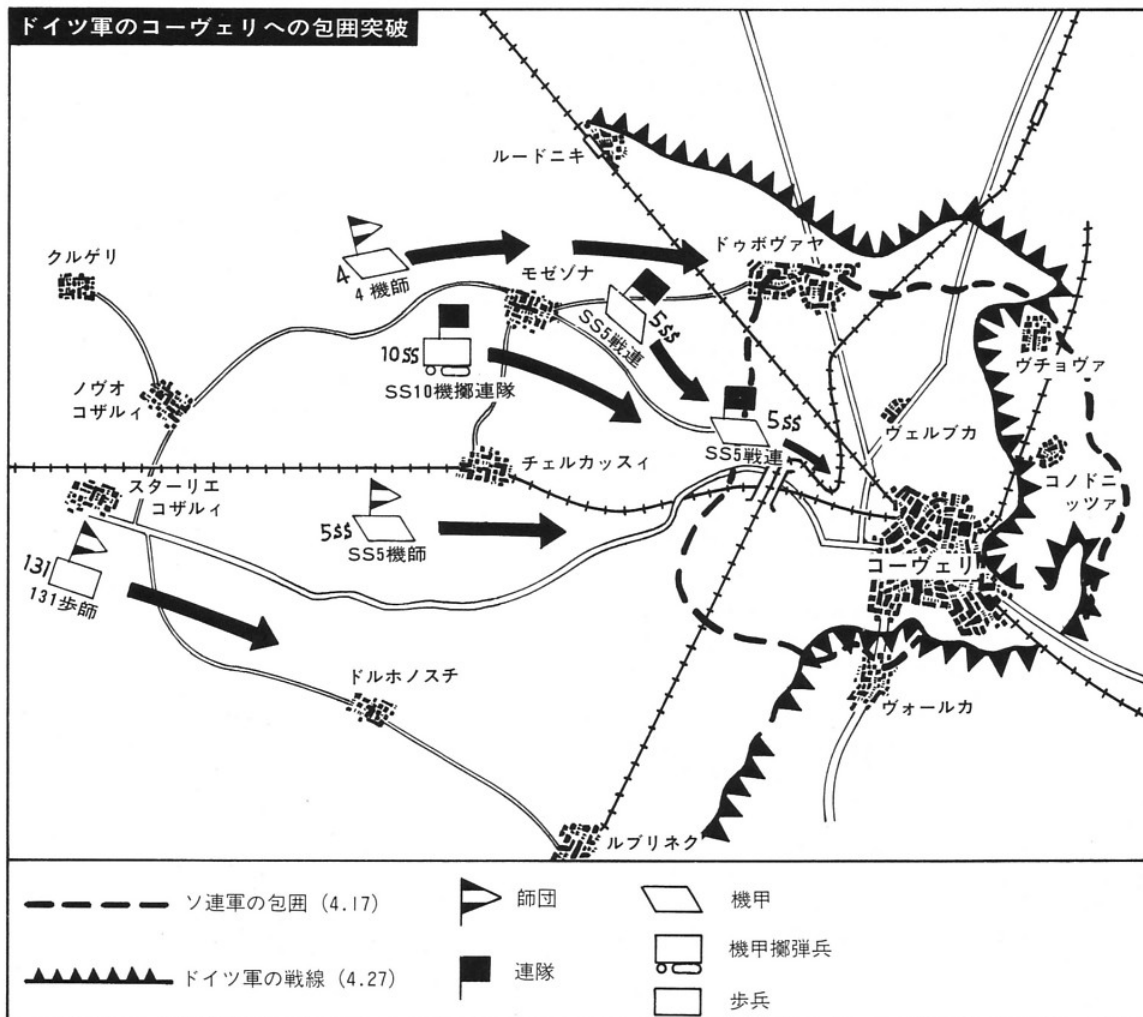
16：30分発 “チェルカッスイで攻撃を続行中”

17：15分発 “チェルカッスイを占領、歩兵によって掃討中。7門の対戦車、4門の野砲を破壊、300名を捕虜とし、（友軍の）稼働戦車8輛、戦死3名、戦車5輛がスタックした”

わずか5輛程度の戦車兵力によって、1000名あまりの

ロシア軍兵力が北のモゼゾナ方面へ撤退させられたのだった。しかし続く命令は、その敵を北へ追えというもので、これは極めて理不尽なものと判断した中尉は、第434連隊第1大隊長のボルム大尉と協議し、相方とも先の命令を無視し、西方コーヴェリ方向への前進を再開することを決断した。

これは、この作戦に大きな奇襲効果をもたらし、9輛





第5SS戦車連隊長ミュールンカンブ大佐（左）と第8戦車中隊長ニコルシーレックSS中尉（右）

ニコルシーレックの授章と第5SS戦車連隊について

SS第5戦車連隊
2a/kdr/Eg

コーヴェリ1944年4月15日

連隊報告

総統は（上記戦車連隊）第8中隊長SS中尉ニコルシーレックに騎士十字章を授与する。

ニコルシーレック中尉は困難な状況にもかかわらず、1944年3月30日にコーヴェリの包囲を突破し、同包囲陣に対し決定的な援助を与え、そこの守備に対し特別な役割りを果たした。

連隊は古くから（わが）師団の一員の一人にこの榮譽ある授章の知らせを誇りとし長く幸運がこの兵士と共にあることを希望するものである。

サイン、ミュールンカンブ(SS大佐)

●ミュールンカンブはヴィーキング師団に1942年4月20日、最初の戦車大隊が創設されて以来、同師団の戦車大隊、連隊長としてその精鋭を巧みに率いて幾多の戦果を挙げた名戦車指揮官で1944年9月21日、全軍で第596番目の柏葉付騎士十字章を授章、終戦時はSS戦車總監となっていた機甲戦のエキスパートであった。

このコーヴェリ戦でも、彼はR02（通常戦車連隊長はR01の砲塔ナンバーだが何か欺瞞の意味があったのかもしれない）のパンター指揮戦車に乗って陣頭指揮を執り作戦を成功へと導くのだが、やはり本稿の連隊史の中に彼がキューボラ上で自信に満ちた微笑を浮かべているベスト・ショットが撮られていた。

『1941年秋に捕虜になったソ連第27軍司令官アルテメンコ少将は「ヴィーキング」師団の比類のない暴猛な戦いぶり」を賞讃し、同師団が陸軍と交替したとき、ロシア兵たちは思わずほっと溜息をついた、と語った。』ここまで恐れられた同師団の最尖兵といえるのが、本稿の中心となったSS第5戦車連隊で、その活躍に比例してここからは上記ミュールンカンブ、ニコルシーレックを含め15名の騎士十字章受章者を輩出している。その顔ぶれはR. ゾイメンニヒト・W. ハイン、O. シュナイダー、H. フリュエゲル、F. ダルゲスなど猛者ぞろいで、同時にこのうちの4名が戦死（3名は1945年のハンガリー戦で命を落としており、本稿に出てきたH. ドール少佐もここで戦死、同戦域の戦いの激しさを物語っている）、1名がロシア軍の捕虜収容所で1945年の4月5日に死亡という、熾烈な戦いぶりを思わせるものであった。（筆者）

からなる彼の戦隊は、午前3時～7時30分くらいにかけての早朝の薄光と共に敢行された攻撃で、コーヴェリへの突破を果たしたのだった。その戦果は、16門の対戦車、2門の対空砲、3輦のシャーマン戦車を撃破、他に多くの小銃、迫撃砲、車輛を捕獲、彼はこの功により1944年4月15日付で騎士十字章を授与されている。

このコーヴェリ戦における中尉の一連の突破行は、第2次大戦戦史でも個人の（むろんこの場合、他の戦車兵、擲弾兵達の活躍も忘れてはならないが）偉業としては特筆すべきもので、最近日本でも彼の個人的手記を元にした極めて詳細な記録が出版されており、ご覧になった方もおられると思うが、ここでは彼の経歴を簡単にまとめてみよう。

1917年3月14日、南チロルのプファッテンで農家の息子として生まれた彼は、北イタリアのパドヴァ大学で経済と法学を勉強中に大戦が勃発、1940年1月に武装SSに志願し、ドイツチュラント連隊に配属され同年6月のバルカン戦に従軍、続く独ソ連で1941年11月まで中央軍集団戦区で戦い、同月士官コースを受けるためバートテルツで学び、1942年の春に少尉へ任官し、ヴィーキング師団へ配属された。

そして、圧倒的な敵兵力、前記のような困難な地形に加えて雪や泥濘となった戦闘条件の中、大胆な突破を果たして包囲網の多くの負傷兵の収容に大きな貢献をしたのだった。

彼は同年夏大尉となり、ヴィーキング戦車連隊第2大隊長となり、ワルシャワ、ハンガリーの苦しい防衛戦に従事、連隊もこの一連の戦いで戦車のほとんどを失うのだが、パーダーボルンで70輦のパンターの再補充を受け（この時期のこのような再装備はかなりの優遇といえ、同師団のエリート性を示している）、西部戦線でアメリカ軍と対峙することとなる（ある資料ではこの末期、同連隊には7輦のエレファント重駆逐戦車が装備されており、セレ付近の戦いで60輦近くのアメ리카軍戦車を撃破したとの記録があり、同師団はここでも東部戦線の経験を生かし、縦横に活躍したのだろう）。

大尉は1945年4月22日にアメリカ軍に投降、1948年に捕虜生活を終えて故郷のチロルへ帰り小さな果樹園を経営、今も存命している彼のもとへは、当時コーヴェリ戦で共に戦った兵士達からの感謝の意を示した手紙が今日に至るまで届いているという。

十戦いの第2段階

しかし、この突破による喜びも束の間で、ニコルシーレックの後の後続が続かず、再びコーヴェリ西方の突破口は兵力で優るロシア軍によって閉じられてしまう。



翌31日から4月の頭にかけて、この要塞都市の西方域で新たに投入された陸軍第4、第5機甲師団、この救出作戦当初から奮戦している第131歩兵師団、“ゲルマニア”を初めとするヴィーキングの残存部隊が東へ東へと力をつくしてにじりより、4月3日、フォン・ザウケン將軍の第4機甲師団がスターリエコザリへ再度到達、4日の朝そこから要塞へ攻撃へ向かうが、その包囲網の中で

も苦しい戦いが展開されていた。

ヴィーキングO1担当のW・ヴェストファル大尉は記している。「輪が再び閉じられてから市には強力な敵の攻撃が幾度も幾度も繰り返され、(前線に近い)われわれの司令部近くには迫撃砲弾さえ落ちてきていた。多くの負傷兵がおり、彼らの収容は困難を極めた。また医師の不足も深刻で、ある一人の軍医はグライダーに搭乗し



▲ロシア軍陣地に向けて砲撃を行なうパンター戦車

◀ドイツ軍の攻撃に対し、反撃の機会をうかがうロシア軍のSU-76自走砲部隊



ヴィーキング戦車連隊第1大隊のIV号戦車

てここへ送られてきたほどであった。

中隊の戦力は減り、敵戦車が幾度も突破をかけてくる。歴戦の兵なら知っているが、敵はつねにその背後に歩兵を従えているのだ。数輦の戦車が司令部近くに1時間あまりも待機して動かず、やっとのことで味方の歩兵のパンツァーファウストで1輦が仕留められ、残りは撤収した。3輦の敵戦車が橋からころげ落ち、そのクルーは捕虜となった。

〔筆者注：ここに記載されている一連のコーヴェリ救出戦の情景は、多くの秀逸なショットがヴィーキング戦車連隊史（ムーニン社刊）に掲載されており、この個所の3輦が下からT-34、T-60、T-34と折り重なってクラッシュしている壮絶なシーンが写されている。〕

また、前述ニコルシーレックの救出行途上でクラッシュしたと思われる第8中隊のパンター数輦のクリアーなショットもあり、彼らは同市へ向かう軌道上の真上を進んだ状

態で擱座しており、脇には片足を失い全身炭化した戦車兵の姿が写されてその戦いの激しさを物語っている。〕

十コーヴェリの解囲と軍医の活躍

『われわれは何度も何度も地図で救援部隊の位置を確認した。これ以上どこまでこの包囲網がもつかはもはや時間の問題であったが、将兵達の士気は高く友軍による救出を少しも疑っていなかった。』

戦いは激しいものであったが、例えばゲルマニア連隊のH・ドール少佐の戦車2コ中隊で増強された戦闘集団は、敵対戦車砲50門を破壊した後、休む間もなくノヴォコザルィ経由、モゼゾナ（コーヴェリ北西）の戦いに投入されている。

4月4日には、第4機甲師団の第33機甲擲弾兵連隊がコーヴェリ北のデュボワ付近の丘を占領、翌5日、ミュールンカンフ（SS第5戦車連隊長）の戦車集団と第4機甲師団、第5機甲師団はデュボワを攻略、ここに至ってついに待望の本格的な突破口が開かれ、同5日の晩、第33機甲擲弾兵連隊の先鋒偵察隊がコーヴェリ北端のゴルフで包囲網の中の警察連隊と出会ったのだった。

その日の早朝から夕方にかけて突破口はさらに広がり、フォン・ザウケンとミュールンカンフは陣中の司令部でグレ將軍と再会、彼はその後4月20日付で、全軍で12番目のダイヤモンド剣柏付騎士十字章を授与されている。

こうしてコーヴェリ要塞は幾多のエピソードを残しつつ解放された。しかし、やはりこれも束の間のことで、その後のロシア軍の奔流のような圧倒的な勢いに飲まれ、このドイツ軍は一掃されることとなる。そして戦いの

第5SS機甲師団“ヴィーキング”の編成（1944年）

師団司令部（師団長：ヘルベルト・オットー・ギレスSS少将）

師団司令部中隊

第9SS機甲擲弾兵連隊“ゲルマニア”

連隊本部

第1～第3大隊

第10SS機甲擲弾兵連隊“ヴェストラント”

連隊本部

第1～第3大隊

SS機甲擲弾兵連隊“ノルトラント”

連隊本部

第1～第3大隊

第5SS戦車連隊“ヴィーキング”

連隊本部

第1大隊（IV号戦車：第1～第4中隊）、第2大隊（V号パンター戦車：第5～第8中隊）

第5SS機甲砲兵連隊

連隊本部

第1～第4大隊

第5SSロケット砲大隊

第5SS対空大隊

第5SS突撃砲大隊

第5SS機甲獵兵大隊

第5SS機甲搜索大隊

大隊本部

第1～第4中隊

第5SS通信大隊

第5SS機甲工兵大隊

第5SS衛生大隊

師団補給隊

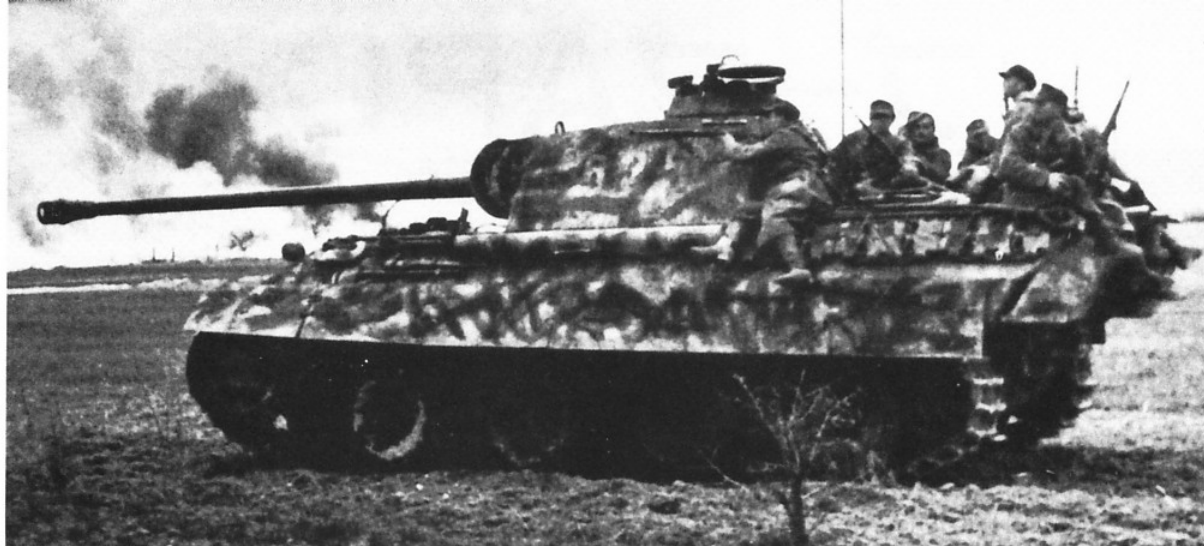
SS機甲擲弾兵大隊“ノルゲ”（1944年より配属）

SS機甲擲弾兵大隊“ダンマルク”（1944年より配属）

SS突撃旅団“ワロニエ”（1943年より配属）

人員定数17,262名（ただし配属部隊を除く）

主要装備：中戦車134輦（IV号64輦、V号パンター70輦）、7.5cm自走歩兵砲12門、15cm自走歩兵重砲6門、10.5cm榴弾砲12門、10.5cm自走榴弾砲12門、15cm自走榴弾砲6門、17cmカノン砲12門、15/21cmロケット弾発射機18門、7.5cm対戦車砲12門、7.5cm自走対戦車砲69門、7.5cm突撃砲31輦、8.8cm高射砲12門、3.7cm自走高射機関砲8門、2cm高射機関砲114門、8.1cm迫撃砲58門、12cm迫撃砲24門、各種装甲車輛359輦



車体後部に擲弾兵（歩兵）を跨乗させて戦うヴィーキング戦車連隊のパンター戦車

中心はワルシャワ方面へ移り、ここでも本稿のヴィーキング師団は敵に頑強な抵抗をみせつけるが、それはまた後に触れる機会もあるだろう。

冒頭でこの師団附属の軍医の話を紹介したが、ここで最後に、このコーヴェリ戦の名も知られていないような局地戦で演じられた戦闘と、そこで活躍した軍医のエピソードを載せてしめくりとしたい。われわれが目にする幾多の独ソ戦の血で血を洗う戦記の中では、イデオロギーを越えた人間的なものを感じさせてくれる数少ないエピソードのひとつだろう。

「1944年の初頭、H. ドール少佐に指揮されたゲルマニア連隊の第1大隊は、輸送途上で直接戦闘に投入され、その路線に沿ってコーヴェリ方面へ進むよう指令され、第1中隊もそれに従って熾烈な戦闘に巻き込まれていった。

僅かに傍受される偵察機からの無線連絡を頼りに中隊は前進、大隊の軍医中尉もこれに加わっていた。数百メートル進むうちに、中隊は沼沢地帯へ踏み込み、大雪でさらに地歩が悪化する中、森林の間隙から激しく射ってくるロシア軍の火線につかまってしまい、たちまち先頭部隊の数名が負傷、ただちに軍医と医療班が駆けつけ手当てに余念がなくなった。敵の姿は全くこちらからは見えず、ただ叫び声が聞こえるだけでわれわれはそれに対し沈黙するだけであった。

周囲に身を隠す場所を求めたが何も見あたらず、兵士達は口々に呪いの言葉を吐いた。そのうち迫撃砲も周囲へ撃ち込まれてきて、まだ若く経験の浅い兵士達はおびえ、軍医は敵弾の荒れ狂う状況で次から次へと負傷兵を手当てしてまわり、そして何かその白く目立つ包帯がまるで士気高揚の象徴のように目に入ってきた。

雪は降りやみ、至る所からドクターを叫ぶ声が続く、彼は増々勢いをつけてきた敵の小銃弾の嵐の中を彼の医療バックと共に奔走し続け、凍てつくような小川へ転んで倒れこんでずぶ濡れになりながら自己の職務を放棄する

ことなく働き続けた。自分の危険はまるで省みている様子がなく、ただ他人のために献身しているようであった。

軍医が大胆に一人の負傷者からもう一人の負傷者へ飛び移ったその時、極めて驚いたことにロシア軍側からの射撃が突然ストップし、その“向こう側（敵のこと）”の一人の兵士が大声で叫んでいた。“Bravo（ブラボー）、ドクター！”医師は少しの間猶予を与えられ、周囲の負傷者の一団を後送することができたのだった。」

コーヴェリ正面でドイツ軍を追撃するロシア軍

